

キハダの内皮は、真っ黄色。「オウバク」と呼ばれる生薬原料ですが、全国でその生産者は激減しています。

しかし、小谷村には、キハダを伐採して皮を剥ぐ方たちがいます。今夏、小谷村保育園の園児たちは、皮剥ぎに挑戦します。

もうすぐキハダの皮、オウバクを採る季節です



社員研修で皮剥ぎ体験した(株)栃本天海堂の皆さん（2022年8月3日）

2011年3月11日、福島第一原発事故により放射性物質が17都県に飛散したため、生薬原料は市町村単位ごとに放射性物質検査をしないと薬に加工できなくなりました。

その結果、大手製薬会社は17都県からの生産物を購入しなくなり、取引していた生薬問屋は生産者からキハダを買わなくなり、小谷村のキハダ生産も4年間止まってしまいました。

しかし、2015年6月25日、小谷村キハダ生産組合が設立され、キハダ生産が復活しました。



いま日本人が買わなくてどうするんだ

2014年、当時の県の林業普及指導員の尽力により大阪市の(株)栃本天海堂と交渉することが出来ました。

9月11日に本社を訪ね、長い付き合いをして毎年1tを出荷してもらえば取引に応じる、との回答を得ました。

後に社長から聞いたところ、「サンプルの品質が良かったことはあるが、姜副社長による、いま日本人が買わなくてどうするんだ、との言葉も大きかった。」との裏話がありました。



左端が現在の栃本社長、隣が姜副社長

資源量の把握、生産組合をつくる

販路が出来ても、長期的に続けられる資源量が無いと止まってしまう。また、出荷量を把握するには、それまで個人がバラバラに買ってもらっていたものを一元化しないと出来ません。

そこで、全戸配布のアンケート調査により資源量と組織化して皮剥ぎをしたい村民がいるか調べました。

その結果、再開したい人たちが20名程度いることから、何度かの会議を経て「小谷村キハダ生産組合」が設立されました。



2015年6月25日 設立総会

皮剥ぎできるのは、1年のうち限られた期間

皮剥ぎ可能な時期は、7月から8月中旬です。

大事なことは、剥いだ日以降に晴天が続くことです。完全に乾かしないと、カビが発生してしまうからです。

剥ぎやすい木は、「鬼皮」と呼ぶ外皮と材からの分離が簡単に出来ます。そうした木は、陽当たりの良い場所で多くの葉を付けている元気なものであることが多いです。森の中のキハダは、上部にしか葉が付かず生長が良くないため、剥ぎにくい傾向にあります。



容易に剥げると楽しい

様々な工夫

皮剥ぎ作業は、夏の最も暑い時期になるので重労働です。また、剥いだ皮は、生皮のため、道路から離れていると運ぶのが大変です。

組合員の中には、ソリを作って運び出している方がいます。背負って運び出すよりも、遥かに多くの皮を運び出すことが出来ます。

剥ぐときは、10cm程度の幅に縦の切れ目を入れている方もいます。そうすることで乾きやすくなり、また皮が丸まってしまうのを防ぐことができます。



ソリ

取引価格は1,200円/kg（税別）

2015年の組合設立当初に850円/kgだった価格は、2022年から1,200円/kgです。

(株)栃本天海堂は、年々少なくなる生薬原料の生産者は貴重な技術の持ち主であるから大切にしていきたい、との考え方です。毎年小谷村を訪れては組合員と意見交換をしてきた結果、現在の価格となりました。

国産キハダが見直されてきたこと、外国産キハダの価格が上昇してきたことなどが相俟って小谷村への問い合わせは増えています。



決められた日にJAへ出荷します

kihada黄金の樹プロジェクト

2016年、現場に放置されているキハダの材や小谷村のその他の広葉樹を積極的に活用するため、『kihada黄金の樹プロジェクト』が始まりました。小谷小学校へキハダの学習机や様々な広葉樹で作った新聞閲覧台、役場の会議室の扉などを設置しました。今春の子育て支援センターのすべり台は、プロジェクトがあったことで製作可能となったものです。プロジェクトの詳細は、別の号で紹介する予定です。

次号予告
『「おたりの森のアレコレ知ってく講座」スタート』